

# 看護系大学生の学業への意識と精神的健康の実態および 進路選択との関係

渡邊 敦子 日下 和代 向井 京子 池田 恵都子

## I. はじめに

大学教育の中でも看護学などの専門職教育においては、知識の獲得や一般的な人間育成の他に、保健医療の専門職として活躍できる人材の育成にも重点が置かれている。看護系学部の大学生（以下、学生とする）は、講義の他に実技演習や臨地実習を通じた技術の育成、それに伴う高次の思考や活動を体験することで、看護師として必要とされる知識、技術、素養を身につける。その過程、とりわけ臨地実習においては、多忙を極めた保健医療現場の中で、知識や技術が未熟な状態で慣れない環境への適応を迫られることによって学生が体験するストレスは大きい。看護系学部の学生のストレス対応能力に関する調査もなされており、学生の不安や対人緊張の強さ、自己肯定感が持てないことなどが、ストレスの増大に関連していることが報告されている<sup>1)</sup>。したがって、看護の専門教育を受ける過程は、ストレス対処能力のほか、学習を進める上での他者との関係性の持ち方や、課題に対する態度といった心理的要因からも影響を受けると考えられる。これらの要因は、一般的な大学教育においては検討されており<sup>2)~7)</sup>、看護系の大学教育においても検討と報告は重要である。

さらに、学生が看護系学部に進学する動機として、看護師等の国家資格取得ができ、就業に有利であることや、両親など家族からの希望が強いことなど、学生自身の本意ではない場合も少なくない。このような消極的な進路選択も、学業や専門職としての教育を受ける動機づけを弱める一因であると考えられる。看護系学部への進路選択の動機と、心理的な状況との関連を検討した調査も、今後報告を重ねていくことが必要である。

本研究では、大学の看護系学部所属している学生を対象に、ストレス対処能力、対人関係パターンや目標志向性と、学生の看護系学部への入学志望動機や看護の専門的学習への認識との関連性について明確にし、教育における支援の検討への一助とすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象および方法

東京都内 A 大学の看護系学部に所属する女子大学生364名。回答者235名のうち欠損のない218名を対象とした（回収率64.6%）。

調査の実施にあたり、研究者より対象者に調査の目的、方法について説明をし、研究協力への同意を得た。回答後の質問紙は返信用封筒に密封の上郵送にて回収した。

表1 対象者の基本属性

変数	頻度及び平均		(SD)
	N=218	n	%
年齢		19.94	(±1.38)
	18歳	40	18.3
	19歳	52	23.9
	20歳	47	21.6
	21歳	43	19.7
	22歳	33	15.1
	23歳	3	1.4
学年	1年	63	28.9
	2年	62	28.4
	3年	32	14.7
	4年	61	28.0
課外活動	運動系	44	20.2
	文化系	27	12.4
	その他	2	0.9
	していない	146	67.0
アルバイト	している	179	82.1
	していない	39	17.9
同居者	いる	186	85.3
	いない	32	14.7

## 2. 調査内容

### 1) 基本属性

学年、年齢、課外活動やアルバイト、同居者の有無について表1に示した。

### 2) 邦訳版 SOC-29尺度 (首尾一貫感覚)

SOC (首尾一貫感覚) 尺度は、Antonovsky<sup>8)</sup> が健康を保持増進させる一つの要因として、強いストレス下での健康維持に着目し、ストレス対処と健康状態の保持に関する能力を測定するものとして開発した。29項目からなる7段階のリッカートスケールである。

### 3) 内的作業モデル尺度

内的作業モデル尺度は18項目からなり、人が他者と自己の関係をとらえる内的作業を図るもので、戸田<sup>9)</sup> によって開発された。内的作業モデルは乳幼児期の愛着パターンによって異なり、外界に対する情報処理や安全感の獲得に関する個人差を測定するものである。「非常によくあてはまる」～「まったくあてはまらない」の6段階で評価し、愛着の3パターン (安定

型、両価型、回避型)の得点により内的作業モデルの個人差を測定した。

#### 4) 促進予防焦点尺度

促進予防焦点尺度は16項目からなり、Higgins<sup>10)</sup>によって開発された。目標に対する志向性と自己評価との関係性を明らかにするものである。促進焦点は希望や理想の実現を目標とし、進歩や獲得の在・不在に焦点を当てる目標志向性である。一方、防止焦点は義務や責任を果たすことを目標とし、安全や損失の在・不在に焦点を当てる目標志向性である。「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の5段階で評価した。

#### 5) 「看護職についての関心」

「看護職についての関心」の項目は、森ら<sup>11)</sup>による、看護学生の職業準備性に関する調査内容を参考にし、研究代表者が独自に8項目を作成した。「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の5段階で評価した。

### 3. 解析方法

解析対象とした218部について、各変数の基本統計量を算出した。「看護職についての関心」とSOC得点、内的作業モデルおよび促進予防焦点の変数間の関係についてはPearsonの相関係数を算出した。また、「看護職についての関心」と基本属性との関連性についてはt検定により検討した。解析にはIBM SPSS Statistics ver.24を用い、有意水準は5%もしくは1%未満とした。

### 4. 倫理的配慮

研究対象者には①研究の趣旨・目的、②研究方法、③自由意思の保証、④同意撤回の保証、⑤情報保護に関する対策(データの保管方法等)、⑥研究結果の公表などを口頭および書面にて説明、調査票の提出をもって同意を得たこととした。本学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号KWU-IRBA#17116)。

## Ⅲ. 結果

### 1) 基本属性

本調査の分析の対象者の基本属性を、表1に示した。対象者の年齢は平均19.94歳(SD:1.38)であり、1年生63名(28.9%)、2年生62名(28.4%)、3年生32名(14.7%)、4年生61名(28.0%)であった。サークルなどの課外活動をしていない者が約3分の2(67.0%)、アルバイトをしている者が8割以上(82.1%)を占めた。また、85.3%の者が家族等と同居していた。

### 2) 看護職への関心8項目の得点分布

結果を図1に示した。「看護系大学への進学を主体的に選択した」者が、「よくあてはまる」、または「あてはまる」と回答した者を合わせて7割以上を占めた。「資格や収入という点で看護職を選択した」者が、同様に6割以上を占め、国家資格が得られること、それに伴い収入が安定

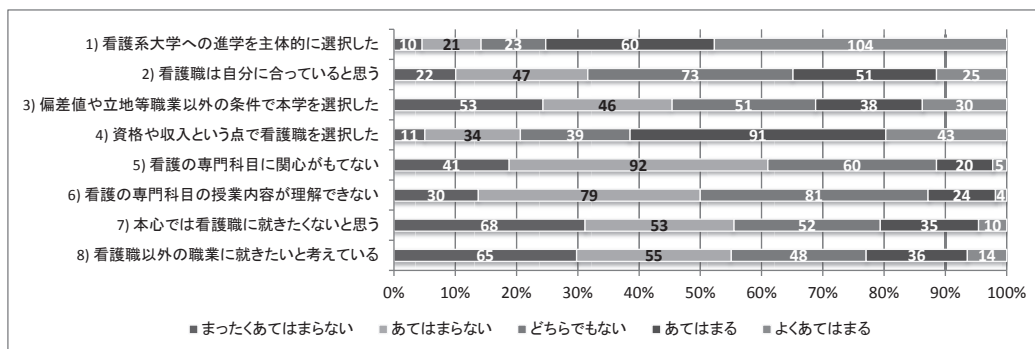


図1 「看護職への関心」8項目の得点分布

していることを理由としている者の割合が多かった。一方で、看護職に就きたくない、看護職以外の職業に就きたいと考えている者が2割程度、看護の専門科目に関心が持てない、授業の内容が理解できないと回答した者が1割程度存在した。

### 3) ストレス対処能力（首尾一貫感覚；SOC）と「看護職への関心」との関連

本調査でのSOC総得点の平均は117.91点であった。看護学生を対象とした先行研究におけるSOC得点は120.5点（SD：17.2）<sup>12)</sup>、118.4点（SD：16.8）<sup>13)</sup>であり、本調査の対象者が若干低得点であった。その平均点の標準偏差の2分の1以上（129点以上）を高群、2分の1以下（107点以下）を低群、その間（108～128点）を中群としてレベル分けを行った。レベルごとの看護職への関心8項目との相関を表2に示した。SOC高群では職業選択や進学、専門的学習への動機づけが高く、SOC低群ではその反対の傾向がみられた。

また、SOC得点の学年との関連を表3に示した。1年生と2年生の間に有意差が認められた。

表2 SOCのレベルと「看護職への関心」との相関

	SOC 得点レベル		
	高	中	低
	SOC 得点		
	129～	108～128	～107
看護職への関心	N=58	N=95	N=65
1) 看護系大学への進学を主体的に選択した	.271**	-.125	-.125
2) 看護職は自分に合っていると思う	.429**	.070	-.480**
3) 偏差値や立地等職業以外の条件で本学を選択した	.117	-.003	-.100
4) 資格や収入という点で看護職を選択した	-.045	-.031	-.006
5) 看護の専門科目に関心がもてない	-.235**	-.002	.245**
6) 看護の専門科目の授業内容が理解できない	-.174**	.036	.145*
7) 本心では看護職に就きたくないと思う	-.295**	.011	.286**
8) 看護職以外の職業に就きたいと考えている	-.256**	-.002	.261**

Pearson's product moment correlation coefficient \* .p<0.05 \*\* .p<0.01

表3 SOC 得点と学年との関連

学年	N	平均値	標準偏差	P 値
1 年	63	124.41	19.40	0.003 * ]
2 年	62	111.35	16.89	
3 年	32	115.53	19.29	
4 年	61	119.18	22.68	
合計	218	117.93	20.22	

\* . $p$ <0.05 \*\*. $p$ <0.01

表4 内的作業モデル（対人関係パターン）と「看護職への関心」との関連

看護職への関心	対人関係パターン		
	安定型	両価型	回避型
1) 看護系大学への進学を主体的に選択した	.173*	-.099	-.201**
2) 看護職は自分に合っていると思う	.262**	-.354**	-.107
3) 偏差値や立地等職業以外の条件で本学を選択した	.015	-.014	-.037
4) 資格や収入という点で看護職を選択した	-.053	-.129	.116
5) 看護の専門科目に関心がもてない	-.154*	.178**	.172**
6) 看護の専門科目の授業内容が理解できない	-.110	.124	-.025
7) 本心では看護職に就きたくないと思う	-.232**	.148*	.188**
8) 看護職以外の職業に就きたいと考えている	-.122	.138*	.139*

Pearson's product moment correlation coefficient \* . $p$ <0.05 \*\*. $p$ <0.01

表5 目標志向性（学業への姿勢）と「看護職への関心」との関連

看護職への関心	促進予防焦点	
	利得接近	損失回避
1) 看護系大学への進学を主体的に選択した	.212**	-.074
2) 看護職は自分に合っていると思う	.320**	-.276**
3) 偏差値や立地等職業以外の条件で本学を選択した	.074	-.103
4) 資格や収入という点で看護職を選択した	-.051	.048
5) 看護の専門科目に関心がもてない	-.249**	.063
6) 看護の専門科目の授業内容が理解できない	-.100	.162*
7) 本心では看護職に就きたくないと思う	-.285**	.058
8) 看護職以外の職業に就きたいと考えている	-.238**	.002

Pearson's product moment correlation coefficient \* . $p$ <0.05 \*\*. $p$ <0.01

#### 4) 対人関係パターン、目標志向性の要因と「看護職への関心」との関連

結果を表4、表5に示した。学習に関する対人関係パターン（内的作業）においては、安定型の対人関係パターンが、職業選択や進学の動機に対し主体性が高く、看護の専門的な学習においても関心が高い傾向が示された。学習の目標志向性（促進予防焦点）においては、促進焦点（利

表6 対象者の属性と「看護職への関心」との関連

	学年	課外活動	アルバイト	同居者
1) 看護系大学への進学を主体的に選択した	.108	.860	.549	.449
2) 看護職は自分に合っていると思う	.007	.837	.282	.825
3) 偏差値や立地等職業以外の条件で本学を選択した	.083	.273	.240	.231
4) 資格や収入という点で看護職を選択した	.170	.720	.894	.112
5) 看護の専門科目に関心がもてない	.008	.701	.259	.741
6) 看護の専門科目の授業内容が理解できない	.004	.758	.257	.259
7) 本心では看護職に就きたくないと思う	.063	.776	.001	.866
8) 看護職以外の職業に就きたいと考えている	.527	.437	.028	.169

学年は Kruskal Wallis 検定, 他は Mann-Whitney 検定

得接近)で職業選択や進学に対する主体性において正の相関、自らの看護職への就業に関する否定的な考えにおいて負の相関がみられた。予防焦点(損失回避)では、「看護職が自分に合っていると思う」の項目で負の相関、「看護の専門科目の授業内容が理解できない」の項目で正の相関を示した。

#### 5) 対象者の属性と「看護職への関心」との関連

結果を表6に示した。学年間では、「看護の専門科目の授業内容が理解できない」において有意差が認められた。また、「本心では看護職に就きたくないと思う」において、アルバイトの有無による有意差が認められた。

## IV. 考察

本研究では、看護系学部の大学1～4年生に対し、看護系学部への入学志望動機や看護の専門的学習への認識と、ストレス対処能力、対人関係パターン、目標志向性との関連性について明らかにすることを目的とした。

本調査の分析の結果、主体的に看護職を選択し、自らの看護職への適性を自覚し、専門的な学習にも関心を持って取り組んでいる者はストレス対処能力が高く、安定した対人関係を築き、積極的な目標志向性を持っていたことが明らかになった。これは先行研究<sup>14)</sup>の結果と一致している。反対に、ストレス対処能力が低く、不安定あるいは回避的な対人関係パターンを持ち、消極的な目標志向性が強い者は、看護職に就きたいという思いに乏しく、専門的な学習にも関心が持たず、学習内容の理解が難しいと考える傾向があった。そのような者の多くは、看護職を選択した理由を国家資格が取得できることや、安定した収入を得られる見込みがあることを挙げていた。近年の女子大学生の進路選択の傾向としては、経済的自立を目指す、もしくは稼ぎ続けたいという危機感が重要となっており<sup>15)</sup>、それに見合う進路として看護職が選択されていると考えられる。

SOC得点が高い者は、低い者に比べ、ストレスを楽観的にとらえ、計画性や情報要約力に優れているほか、自尊心が高く前向きな思考を持ち、親和性があり、リーダーシップもうまくとること

ができるとされている<sup>16)</sup>。また、ストレス状況下においてその原因への失望や不満の表明が少なく、その原因を自己に求めていく傾向にある<sup>17)</sup>。本調査の対象者のSOC得点は、1年生と比較して専門科目の授業が多くなる2年生で有意に低かった。その時期にはとりわけ、ストレス状況下でも前向きに取り組んでいけるような支援の検討が必要である。

また、専門職を養成する大学では、学生は一般成人としての他、専門職としてのアイデンティティの確立も課せられている。看護職においても、職業アイデンティティの確立は学部教育の時期から始まるとされている<sup>18)</sup>。職業アイデンティティの確立への支援に関する研究では、学業や実習等によって体験されるストレスが大きいため、学生が自己肯定感を持てるような支持的対応の重要性が述べられている<sup>19)~21)</sup>。対人関係パターンが安定型の傾向が強い者は安定的な対人関係を築き、自尊心が高い<sup>17)</sup>。このような傾向にある者は、看護職を選択した理由にかかわらず、自らの職業選択において適切な情報を持ち、実習等のストレスの多い体験にあっても、友人との良好な関係を活かして課題を克服することができると考えられる。一方で、両価型、回避型の傾向が強い者は自尊感情が低く、劣等感を抱きやすい。また、他者への不安も強く、大学生活において適応している感覚を持ちにくい<sup>21)</sup>。教員にとって気がかりな態度を示す学生ほど大学生活に適応できず、居心地の悪い思いをしていると考えられ、なんらかの手を差し延べる必要があるだろう。

## V. 本研究の限界と課題

本研究は、一大学の看護系学部を対象とした調査であり、全体的な看護系大学生の状況を反映したものではない。また、看護職や学業への関心などは、対処能力、対人関係パターン、目標志向性の側面以外からも影響を受けているため、ほかの側面からも明らかにする必要があると考える。

## 謝辞

調査にご協力くださいました学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

## 参考・引用文献

- 1) 本江朝美, 高橋ゆかり, 古市清美: 看護学生の Sense of Coherence と自己および他者に対する意識との関連. 上武大学看護学部紀要 6 (2): 1-11.2011
- 2) 小泉茅乃, 齊藤勇: 愛着傾向が青年期の人間関係に及ぼす影響について. 立正大学心理学研究年報 6:75-88.2015
- 3) 落合良香: 大学生の学習方略に関する検討: 目標志向性が方略仕様に与える影響に着目して. 人間文化研究科年報 29:101-116.2014.
- 4) 山崎理恵, 村松公美子: 大学生における抑うつ傾向について-内的作業モデルの視点からの検討-, 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 7 : 55-62.2014
- 5) 尾崎由佳, 唐沢おかり: 自己に対する評価と接近回避志向の関係性-制御焦点理論に基づく検討-. 心理学研究 82 (5) :450-458.2011.
- 6) 畑野快: 自己調整学習の有効性と検討課題及び大学教育への導入についての一考察. 京都大学高等教育研究 16:61-72.2010
- 7) 大井京子: 内的作業モデルと不安・抑うつとの関連. 東京家政大学臨床相談センター紀要, 第4集17-29.2004
- 8) Antonovsky, A.: Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well. Jossey-Bass

- Inc.198735 (3) :196-204.2002.
- 9) 戸田弘二.: 内的作業モデル尺度 堀洋道 (監修) 心理測定尺度集Ⅱ - 人間と社会のつながりをとらえる (対人関係・価値観) サイエンス社 109-113.1988.
  - 10) Higgins, E. T.: Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 1-46.1998.
  - 11) 森美春, 西山ゆかり, 木戸久美子: 四年制大学の看護学生における職業準備性. *滋賀医科大学看護ジャーナル*, 3 (1) :55-63.2005.
  - 12) 本江朝美, 川口毅, 谷山牧, 平吹登代子: 女子看護学生の Sense of Coherence とその関連要因の検討. *昭和医学会誌*, 65 (4) :365-373.2005
  - 13) 本江朝美, 高橋ゆかり, 桑田恵子, 杉山洋介, 谷山牧, 益子直紀, 吉岡一実: 看護学生の不安に対する認知的評価と Sense of Coherence との関連. *上武大学看護学部紀要*, 5 (1) :1-10.2009
  - 14) 大鳥和子, 福島和代: 看護大学生の志望動機とストレス. *心身健康科学*, 13 (2) :62-71.2017
  - 15) 松並知子, 西尾亜希子: 女子大学生のキャリアプラン選択の規定要因—稼得意識、職業選択に対する自己効力、自尊感情、職業観—. *女性学評論*, 32:25-52.2018
  - 16) 嘉瀬貴祥, 上野雄己, 大石和男: 高い Sense of Coherence を持つ者のライフスキルの特徴と構造に関する探索的検討. *パーソナリティ研究*, 25 (1) :93-96.2016
  - 17) 銅直優子: Sense of Coherence (首尾一貫感覚) とストレス状況下における反応スタイルの関係について. *流通科学大学論集—人間・社会・自然編一*, 22 (2) :125-131.2010
  - 18) 森岡茜, 鹿田優美, 香川香: 大学生における適応感と内的作業モデルおよびタイプ A 行動特性の関連性. *Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要*, 8: 21-29.2018
  - 19) グレック美鈴: 看護師の職業的アイデンティティに関する中範囲理論の構築. *看護研究*, 35 (3) , 196-204, 2002
  - 20) 千田寛子, 堀越政孝, 武居明美, 他: 成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析. *群馬保健学紀要*, 32, 15-22.2011.
  - 21) 荒川千秋, 佐藤亜月子, 佐久間夕美子, 他: 看護大学生における実習のストレスに関する研究. *目白大学健康科学研究*, 3:61-66.2010.